



リサイクル社会から循環型社会へ

戦後築かれた快適で豊かな生活は、大量に生産し消費する社会構造が基礎となり、生活になくてはならない品物を一般庶民に普及させました。

しかし、いつからか、私たちの豊かさの尺度は「大きい」「たくさん」「所有」することに視点を置くようになり、ぜいたく品が次々必需化していった近年の価値観の変化は、自然の浄化作用の範囲を越えて生態系の機能を崩し、地球に過大な負荷を与えることになりました。

現在再び、かつて庶民生活の中では当たり前の習慣であったリサイクルが復権し、取り組みが進められていますが、使い捨てに慣れた全ての市民が参加することは容易でなく、量的にも質的にも複雑に膨らみすぎた現在社会では完全な問題の解決には至りません。

このような背景のもと、平成 12 年に成立した「循環型社会形成推進基本法」は、リサイクル以前の取組として、ごみを根本的に出さない「発生抑制」「再使用」を位置付け、「循環型社会」像を示しました。「ごみを出さない」とは、どのような生活によって実現できるのでしょうか。

京都の伝統にみる「ほんまもんをえらぶ」「始末するところ」

京都には「浪速の食いだおれ」に対して、「京の着だおれ」という有名な言葉があります。着道楽を表現したこのたとえの底流には、庶民の物を大切にすると粋なセンスに支えられた京都の伝統をみることができます。

例えば、京都ではよそゆきとふだん着の区別を厳しくし、「いいもん」は晴れの日装いとして日頃は大切にしています。これは、決して見栄だけではなく、出会う人への心遣いとも言われますが、やはり、「ほんまもん」を選んでいいものは末永く使おうという強い意思のあらわれでもあります。

一方、ふだん着についても、値打ちのある半端物や難物、きず物を上手に見つけ出し、自分なりに手直しをして、粋に着こなすなど洗練されたセンスで日頃のおしゃれを楽しみます。

つまり、京人のおしゃれは、日頃は慎ましい暮らしの中で培われた文化であり、「本物を買えば、長く使えるし、長持ちさせようとする。」「そのときは高くても、娘へ、孫へと代々使えば、損はない。」といった、質素ともケチともいえるこの微妙な「始末」という考え方は、都でこころ豊かに暮らすために、京の人たちが自然と身につけたテクニックであり、もともと生活の底流に脈々と受け継がれてきた習慣であるように思います。

表紙：高月 紘（ペンネーム ハイ・ムーン）

京都市ごみ減量推進会議会長

日本漫画家協会会員

京都大学環境保全センター教授、工学博士



物質的豊かさから精神的豊かさを。

「世界文化遺産」として認められた京都というまちは、1200年もの長い歴史の中で決して風化することなく、逆に一日一日時間を経るごとに価値を増してきたまちでもあります。

これは、そこに暮らす人たちが、おごることなく、大切にしてきた伝統文化を自信をもって次代に受け継いできた成果であり、1200年に渡る幾重にも積み重ねられた工夫と努力の賜物であるともいえます。

近年、流通革命や情報化といった社会の大変革によって、私たちの生活水準は大きく向上しました。しかし、一方で、日本全国、さらに世界中においてコピーされた文化に覆い尽くされ、地の文化が薄れていくようにも思えます。

今後、この京都というまちの価値を下げるも高めるも、わたしたちの手にかかっています。環境問題が叫ばれるようになってからおおよそ30年。1200年という長い歴史の中の一瞬を生きるわたしたちが、選択を誤らぬよう、今起こっている身近なごみ問題を通して、いま一度、「京都の未来」を考えてみませんか。

目次

古都京都とエコライフ	1
京都のごみの現状	3
ごみ質のうつり変わり	5
モノがあふれたわたしたちの生活	7
あなたが捨てたごみとの関係	
あなたが捨てたごみと京都のごみ対策	9
あなたが捨てたごみと輸入大国ニッポン!	11
京都市のごみ減量・リサイクル計画	12
思いやりの後始末～ごみの出し方減らし方～	13

コラム 買って、捨ててかかった費用

タダではない公共料金『ごみ代』	4
無駄に捨てられる食べ残し・手付かず食品の値段	6
どっちがトクなの? 「紙おむつ」V.S. 「布おむつ」	8
使ってすぐに捨ててしまう容器包装の負荷	14

